

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア語とジェンダー

深草 真由子

イタリア語には男性か女性かという文法上の性の区別がある。「すばしかった」というにしても、主語が男性名詞の「映画(film)」か女性名詞の「試合(partita)」かで、そのあとに続く過去分詞と形容詞の形がかわってくる。人が主語になるときもそれは同じで、その場合、文法上の性はその人の性別と一致するから、「彼女(lei)」のことを話題にしているなら、それに関連する形容詞などは女性形になる。イタリア語の文法はそうした意味で生物学上の性と切っても切り離せない。

文法と性別が密接にかかわっている以上、社会における男女のあり方や個人の性自認というのが言語にも反映されてくる。ここでは、女性の地位が昔にくらべて向上した今、また、すべての人がより自分らしくいられる未来にむけて、イタリア語に起きている小さな変化のいくつかを紹介したい。



【イタリア語の辞書】

出典: <https://it.wikipedia.org/wiki/Dizionario>

勉強した方にはおさらいになるが、イタリア語の名詞と形容詞の語尾変化は、男性の単数が o、女性の単数が a、男性の複数が i、女性の複数が e となるか、もしくは男女ともに単数が e、複数が i となるかの 2 つが基本である。形容詞の libero (自由な) と umile (つましい) を例にしよう。

(男・単) libero - umile

(女・単) libera - umile

(男・複) liberi - umili

(女・複) libere - umili

学習者は男性・単数の形を覚え、残りはこのパターンにのっとして作ればよい。辞書に載っている見出し語も男性・単数の形である。それは人を表す名詞でも同じで、たとえば impiegato であれば、impiegato という男性のオフィスワーカーを意味する語が大きく太字で書いてあり、その横に小さく「女性の場合、語尾は a になりますよ」ということが示されてある。男性が(男性だけが)メインで、女性はその付け足しであるかのように。

言語学者のヴァレーリア・デッラ・ヴァッレによると、男性・単数を見出し語とする原則に科学的な根拠はなく、そうであるにもかかわらず、それがこれまで当然のようにまかり通ってきたのは、男性優位の価値観の反映でしかないという。であるから、デッラ・ヴァッレが歴代初の女性編集長になって世に問うた 2022 年版の『トレッカーニ辞典』では、男女の両方の単数形が見出し語になっている。それも、アルファベット順に並べるのが辞書のルールであるから、多くの場合、a で終わる女性が

先に来て、o で終わる男性がその後ろにつづく。

amica, amico(名詞「友人」)

bella, bello(形容詞「美しい」)

というかんじで。この語の並びがもつ響きはなかなか画期的である。これまで通り男性・単数の形でこの辞典をひくと、探している単語が「あるはずの所にない」ということになって、はじめは少し戸惑うかもしれない。だが慣れてしまえばそう不便でもないだろう。

ジェンダーの平等に配慮した言葉づかいについては、教育省が出している行政文書の記述法にかんするガイドラインが参考になる。ポイントとなるのは職業名と、男女を含む集団の表し方の 2 点である。

①職業と役職を表す名詞

これまで男の人が担うことが多かった職業と役職を表す男性名詞にも、それに対応する女性名詞がある。そしてその仕事をしているのが女の人であれば、女性名詞を使わない言語学上の理由はいっさいない、とガイドラインにはある。

だから女性の建築士は *architetto* ではなく *architetta* であり、オーケストラの指揮者が女性であれば *direttore d'orchestra* ではなく *direttrice d'orchestra* である。女性と男性で形が変わらない場合は、それにつく冠詞でもって女性名詞であることが示される。だから女性の裁判官は *il giudice* ではなく *la giudice* である。(逆に「警備員」*guardia giurata* など、その仕事をしているのが男の人であっても、名詞の性は女性であるものも存在するので注意が必要)

②男女から成る集団の表し方

複数の人たちをまとめて表すとき、そのグループに一人でも男の人がいれば、男性の複数形を使うのが一般的である。しかしこのような (*maschile inclusivo* と呼ばれる) 形はできるだけ避けるべきだというのがガイドラインの考え方である。

その代わりにできる工夫の一つは、性別を特定しないで済む別の表現を探すことである。たとえば「全員」は *tutti* ではなく *tutte le persone* (すべての人々) とするとか、「～な人」は *chi* や *chiunque* で表すとかだ。また *personale*

dipendente (職員) のような集団を表す語句も使える。非人称の *si* や受動表現を用いて構文そのものを変えてしまうこともできる。

もう一つは女性の存在を「可視化」する方法だ。たとえば *i docenti e le docenti* (男性の教官らと女性の教官ら) のように、あえて女性を出すのである。語数を節約したい場合は斜線を用いて *i/le docenti* と表記することもできる。男性を先にもってくるか、女性を先にもってくるか、その順番は自分で決めてよい。ただしその名詞に関連し、それに性を一致させなければならぬ形容詞などは男性の形だけでよいということになっている(そうでなければ文章があまりにも長く、分かりにくくなってしまふ)。よって女性を先に、男性をその後ろに並べるほうがすっきりとスマートな文章になる。たとえば *le docenti e i docenti ai quali sia stato concesso l'esonero* … (免除が認められた教員らは) のように。

このガイドラインは行政文書にかかわるものであり、マスメディアやビジネスメールなどにおける言葉の選ばれ方に影響することはあっても、個人の使用を強制するものではない。だからプライベートの会話の中で、男も女も皆まとめて *tutti* と呼んだところで何の問題もないし、「私たちの存在を無視しているのか」と怒りだす女の人もまずいない。

ただ、普段から「ジェンダー平等」に配慮した言葉づかいをしようと努めている人たちもいるし、筆者もできるだけ気をつけたいと思っている。①は語彙レベルの変更だからそう難しくはない。語数が多くなったり、文章レベルで変更が必要になったりする②は少し面倒なこともあるが、まずはグループチャットなどのくだけた書き言葉の定型表現を変えていくのだ。「みなさん、こんにちは」は *Buongiorno a tutti* ではなく *Buongiorno a tutte e tutti* とする、といった簡単なことから。

しかしこれまでの習慣というものがあるから、受け止め方はやはり人それぞれである。「弁護士」は女の人でも *avvocato* と言われることが今もまだある。女性の「大臣」を表す *ministra* はもはや毎日の TV ニュースで耳にしにしない日はないくらいに使われているが、違和感を覚えている人もい

るかもしれない。

またイタリア初の女性首相ジョルジャ・メローニも、単に聞きなれないためか、あるいはなんらかの言語学的根拠があつてか(ガイドラインには「言語学上の理由はいっさいない」と書いてあつたが)、もしくは政治信条からか、自分のことが女性名詞で表されるのを好ましく思っていない。首相官邸の広報ではおなじ presidente でも、他の女性の政治家には女性・単数の定冠詞がつく la Presidente が、メローニには、本人の意思を尊重して、男性・単数の定冠詞がつく il Presidente が使われている。

Il Presidente Giorgia Meloni ha incontrato a Bruxelles la Presidente del Parlamento europeo Roberta Metsola, la Presidente della Commissione europea Ursula von der Leyen e il Presidente del Consiglio europeo Charles Michel. ジョルジャ・メローニ首相はロベルタ・メツォラ欧州議会議長、ウルズラ・フォン・デア・ライエン欧州委員会委員長、シャルル・ミシェル欧州理事会議長とブリュッセルで会談した。(2022 年 11 月 3 日)



【ジョルジャ・メローニ首相】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Giorgia_Meloni

男性か女性かではない、まったく別の方法を試みる動きもある。シュワーと呼ばれるのがそれで、単数形の語尾を ə、複数形の語尾を ɔ とするやり方だ。これを使って Buongiorno a tuttə(みなさん、こんにちは)と書くと、男性と女性だけでなく、男女のどちらにも属しないと自認している人たちのことも「みなさん」の中に含めていることになる。小説家でフェミニストのミケーラ・ムルジャの著作『神がクィアを守らんことを』では「発展途上にある言語が今現在において可能とするだけ最大限に多様性が表現されるように」と、全編でシュワーが使われている。また高校卒業資格試験の小論文にシュワーを使った学生がいたというニュースもあった。

本来シュワーというのは ə のことで、「あいまい母音」を示す音声記号である(英語の again の語頭の音がこれである)。もう一つの ɔ もやはり音声記号であり、両方とも標準イタリア語の母音のいずれにも音が似ていないという理由で選ばれた。今のところシュワーが使われているのはごく一部に限られていて、普段目にする機会はめったにないし、クルスカ学会の言語学者からは否定的な意見も出ている。しかし、よりインクルーシブな社会をめざして考え出されたものであるから、この実験的アプローチが今後どのように展開していくか、見守っていきたい。

参考文献

Giovanni Audiffredi, *Valeria Della Valle, la più grande linguista italiana: "Più una persona è colta, più è semplice"*, la Repubblica, 5 ottobre 2023.

Linee Guida per l'uso del genere nel linguaggio amministrativo del MIUR, Ministero dell'Istruzione, dell'Università e della Ricerca, 2018.

Michela Murgia, *God save the queer. Catechismo femminista*, Einaudi, 2022.

(元当館スタッフ)

* ジューズィ・クアレンギ

『わたしは あなたは』*

杉 栄子

先日、大学の授業でイタリア語長文読解の練習をするため、イタリア移民事情について書かれている説明文を学生たちと一緒に読んだ。イタリア統一後の19世紀終わり頃と第二次世界大戦後に、数百万人のイタリア人がアメリカや、オーストラリア、北欧などへ移住した。現在、その移民たちの子孫は世界中に6千万人以上おり、その中にはロバート・デ・ニーロやクエンティン・タランティーノ、マドンナやレディ・ガガなど、世界的に成功し有名になった人もいる。

イタリアは移民を送り出す側であったが、経済が発展し国が豊かになってきた1970-80年代からは、移民を受け入れる側になった。こちらのイメージの方が強いらしく、学生たちからは「移民を送り出していたことを知らなかったから驚いた」「レディ・ガガがイタリア移民の子孫とは知らなかった」といった感想が相次いだ。

移民を受け入れる側になって約50年が経ったわけだが、ISTAT (Istituto Nazionale di Statistica 政府中央統計局)によると、2022年1月1日現在、約500万人の外国人がイタリア国内に居住している。イタリアの人口は約5900万人なので、その8.5%、イタリア人12人に対し1人が外国人ということになる。ちなみに同じ時期の日本はどうだったのか調べてみたら、2021年末の時点で外国人は約276万人、日本の人口の2.2%だった。日本人46人に対し外国人は1人の計算なので、約4倍の差がある。もちろんどちらの国も、外国人が満遍なく各地に居住しているわけではなく、地域によって多い少ないはあるが、生活の中で外国人と接する機会が、日本と比べてイタリアの方がはるかに多いことは間違いないだろう。

イタリアに到着する移民といえば、アフリカ方面

から船でやってくる人たちという印象がある。ニュースなどでよく見かけるのは、設備や装備が不十分な船に、大勢の人たちがすし詰め状態で乗っている映像である。そんな状態が安全であるわけがなく、2013年10月には、500人以上を乗せてリビアから出発した漁船がランペドゥーサ沖で沈没。368名が犠牲になるという非常に痛ましい事故があった。その悲劇から10年の今年、犠牲者たちの遺品展がミラノで開催されたり、犠牲者追悼と移民に関わる様々なテーマ(紛争、貧困、人身売買、海難救助、移民の受け入れなど)についてのワークショップがランペドゥーサで行われたりした。

こんな風に記事を始めてしまったが、私は「移民」というテーマに関して全くの素人である。彼らの背景や事情について、詳しく知っているわけでもなければ、専門的に勉強をしたこともない。ただ、安全とは程遠い船(この10年で地中海ではおよそ3万人が犠牲になっている)に乗ってイタリアへやってくる人たちの映像を見ては、こんな危険を冒さねばならないなんて、どんな事情があるのだろうと想像する。もちろん、より安全な方法で移住する人たちもいるが、いずれにせよ、生まれ育った故郷を離れる選択をするのはどんな気持ちだろう、言葉も考え方も異なる土地へ行くのは、どれほど心細いだろうかと思う。せめて、新たな土地での生活が安心できるものであって欲しいと願うのみである。

そんな私を温かい気持ちにさせてくれる本との出会いがあった。友人でイタリア語翻訳者のよしみあやさんが、訳したばかりの小説を送ってくれたのだ。児童文学作家ジューズィ・クアレンギの『わたしは あなたは(原題:IO SONO TU SEI)』という作品で、「ベアトリーチェがアジザの、アジザがベアトリーチェの伝記を書く話」と副題がついている。

あらすじはこうだ。図書館員のマリーナさんは、図書館を利用する子供たち向けに、あるワークショップを企画する。それは、子供たちがペアを組み、相手の伝記をお互いに書く、というもの。子供たちは、伝記を書くためには何が必要かを皆で話し合い、ペアを作っていく。そこで誕生したペアのひとつが、副題にあった2人の女の子、ベアトリー

チェとアジザである。ベアトリーチェはイタリア人の名前であるが、アジザはそうではなく、外国にルーツを持つ名前だ。ベアトリーチェは 8 歳で小学 3 年生であるのに対し、アジザは 10 歳だけだ小学 2 年生。自分より大きいのにアジザはどうしてまだ 2 年生なの？と尋ねるベアトリーチェの質問から始まり、名前しか知らなかった 2 人が、伝記を書くという目的に向かって質問し合い、徐々に相手のことを知っていく。



【『わたしは あなたは』(12 月 15 日発売予定)】

最初は、生まれたところ、話す言葉、髪の色や目の色など、お互いの違っているところに気が付く。ベアトリーチェは、両親や兄、祖母と一緒に暮らしているが、アジザは 2 年前に母親と一緒にモロッコからイタリアへやってきた移民である。母親が平日は住み込みで働いているため、アジザは土日しか母親と過ごせず、平日は施設で暮らしている。妹と弟がいるが、彼らは祖母と一緒にモロッコに残っている。

伝記を書くための質問は、本人同士だけではなく、その家族へのインタビューへと広がるのだが、ここで移民に対して良い印象を持っていない大人が登場してくる。例えばベアトリーチェの父親であ

る。ベアトリーチェがアジザと彼女の母親を昼食に招いてインタビューをしたいと伝えるが、彼は全く良い反応を示さない。それどころか、「人を当てにする人たち」「助けてくれると思ったら、離さなくなって、なんだかんだと要求する」と、移民のことを表現する。(私は仕事でたくさんイタリア人と話す機会があるが、移民についてこんな風と言う人は実際にいる)。ベアトリーチェの母親や祖母、兄が助け舟を出し、最終的には父親もアジザと母親を招くことを受け入れる。

一方、招かれる側のアジザの方でも、母親が招待をすぐには受け入れない様子が描かれる。母親はイタリア語が話せないわけではないが、話せればいいというものでもないと言う。躊躇した理由はここでははっきりと明かされないが、後の方で、母親は、住み込みで働く家の奥さんから、厄介ごとを持ち込むかもしれない人と思われることがわかる。自分たちはイタリア人に受け入れられないのではという不安があるのだろう、ベアトリーチェの家には行くが、母親はあまり話さないでその日を終える。

ベアトリーチェとアジザは質問のメモを見返したり、インタビューの書き起こしを読み返したりしながら、徐々に伝記をまとめていく。すると今度はお互いの共通点をたくさん発見して「驚くやら喜ぶやら」する。2 人とも望まれて生まれてきたこと、2 人とも赤ん坊の時は真っ赤になってうんちをしていたこと、おまるでおしっこをしたがらなかったこと、子守唄よりママの声が好きだったこと、そして生まれてはじめて話した言葉など。

同じように見えるところが実は違って、違っているように見えても共通点がある。これに気がつくことが大切なのだと教えてくれる。

その後も、ベアトリーチェはアジザの母親ファティマに、アジザはベアトリーチェの兄ジョルジョに会い、伝記を書く相手のことをさらに教えてもらう。ジョルジョが妹をどんな風にかからうか、そしてどんな風に大切に思っているか話すのを聞いたアジザは、モロッコに残っている妹や弟、5 歳で死んでしまったもう一人の弟、その悲しみに耐えきれず姿を消した父親のことを思い出す。アジザの寂しさや悲しさが伝わってくる場面である。またベアトリーチェの方はファティマから「喜びとおそれ

いっぱいのお話」を聞き、心の中に言葉にできない塊があるのを感じる。

ワークショップの開始から1年が経ち、アジザはイタリア語が上達し、飛び級で5年生になる試験を受ける予定だ。2人はますます理解し合い、夏休みは何週間かを山で一緒に過ごすほどに仲良くなっている。図書館員のマリナさんは、伝記を書き上げる期限をもうけず、これからも、人生を生き、それを語る時間があることを願い、小説は終わる。

2人の物語はここまでだが、この本には面白い仕掛けがある。読み終えた人に、自分の、もしくは誰かの伝記を書きたくありませんかと問いかけてくるのだ。その際に役立つであろう質問と、その答えをメモするページまで準備されている。あなたの、もしくは誰かの、これまでの人生を振り返ってみる機会になるかもしれない。

作者のジュズィクアレンギは1951年、北イタリアのベルガモで生まれた。小さい時から物語を作っては飼っていた猫に聞かせていたらしい。1982年に児童文学作家としてデビュー。子供から大人まで幅広い年齢層に向けて、詩や物語など、数多くの作品を発表している。2006年にイタリア・アンデルセン賞最優秀作家賞を受賞。翌2007年に本書『IO SONO TU SEI』がイタリアで出版された。日本でクアレンギの翻訳が出版されるのはこの作品が初めてである。近年は日本の昔話を題材にした作品も書いているとのこと。どんな内容なのだろう。



【ジュズィクアレンギ（本人提供）】

訳者のよしとみあやさんにお聞きしたところ、クアレンギはイタリアで評価されている作家であるが、派手な成功をしているわけではないとのこと。

つまり、国外でも評価されているとか、子供なら誰でも一度は読むとか、映画化・アニメ化されたとか、社会現象になったとかいうことはなく、むしろ地味な作家と言えるかもしれない。でも、これまで手に取った彼女の絵本や詩、小説など、幅広いジャンルでテーマもいろいろな作品には、それぞれにきらりと光るものがあるって、イタリアでよく言われるところの un piccolo gioiello (小さな宝石) という表現がぴったりくるそうだ。

日本でも外国人が増えつつあり、相手を知ることが大事だとよく言われる。その一つの方法として、2人が伝記を書き合うというのはユニークで面白いと思ったことが、本書を訳すきっかけになったと教えてくれた。

私はクアレンギの本を初めて読んだ。残念ながら移民の中には犯罪に手をそめてしまう人もいる。でも、一部少数の人が作り出した悪い印象を全体に当てはめるのではなく、一人の人について知っていくことの大切さ、そして異なる文化を知ることには自分の人生を豊かにするというのを、あらためて教えてもらった。

最後に、イタリア・アンデルセン賞とは、1982年に設立された、児童文学分野の文学賞である。子供向けの作品を対象にした賞としてはイタリアで最も権威がある。最優秀作家賞のほかにも、対象年齢ごと(0～6歳、6～9歳、9～12歳、12歳以上、15歳以上)、絵本や漫画など、多くの部門に分かれており、それぞれで最優秀作品が選ばれる。さらに、作品のみならず、子供たちに本の文化を広めることに貢献した人物や団体に贈られる特別な賞も設けられている。

(当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>